

第8回 テーマ 「子どもの理解と教育相談」

- ・期 日 平成23年11月25日(金) 3、4時限
- ・受講者 学生 20人 (4年次19人、大学院生1人)
- ・学部教員 井門正美教授(教職実践演習実施委員会委員長)
石黒純一教授、内海 淳准教授
- ・担当教員 斎藤 孝客員教授、石橋研一客員教授、神居 隆特任教授

外部講師の紹介

外部講師である県総合教育センター・鈴木幸子副主幹の紹介等(斎藤客員教授)

講義「子どもの理解と教育相談」

鈴木副主幹がスライドをもとに次の内容で講義を行った。

総合教育センターでの教育相談

- ・教育相談の状況
- ・不登校の児童生徒への対応
教育相談で心がけること
- ・話の聞き方
- ・保護者への対応
- ・解決志向ブリーフセラピー
教育相談の実際



まとめとして、鈴木副主幹は、助言より傾聴、原因探しよりリソース探し、解決のゴールは本人に聴く、そして子どもから自己解決する力を引き出すことが大切であることが力説された。

演習

小学校1年男児の母親からの相談事例を取り上げ、グループに分かれて協議を行った。

協議の進め方では、相談内容に関する質問ののち、Aくんに対する担任の対応の在り方について本児や家族、校内の連携の在り方などの観点から付箋紙を用いた話し合いを行い、具体的な対応策についてそれぞれ発表した。



リフレクションノートから

- ・「教師は話し上手の聞き下手」という言葉がとても印象に残った。相手の話をしっかり聴くことの重要性を改めて実感した。
- ・相手を理解しようとする姿勢や態度が大切であると思った。
- ・教師が主体的になって問題を解決するのではなく、生徒の内面を大切にしていきたい。
- ・「問題のある子」と固定観念や決めつけをしないで、まず子どもの気持ちを汲み取ることが大切にしていきたい。

事例

小学校1年生の男子の母親から「学校の校長先生から『学校は勉強を教えるところです。家では、しつてをがんばってください。同じクラスの友達も、お宅のAくんのために勉強に集中できなくて困っているんです』と言われました。それで今は学校を休ませています。私は、どうしたらいいでしょうか」との教育面談の申し込みがあった。

WISC- の知能検査の結果

全IQ88 言語性IQ92 動作性IQ86

学校での問題行動

授業に集中できない。途中で大声を出したり教室から勝手に出ていく。時には家に帰っていたこともある。学習で使ったプリントは、机の隅に押し込められファイルに綴じられていない。忘れ物も多い。

家族は、本人と4歳の妹、両親と祖父の5人家族。母親は家において、家事や必要に応じて祖父の畑仕事を手伝っている。父親は近くの会社に勤めている。夜勤はない。

居住地は、周囲に田園が広がる農村地帯。互いに顔が分かる人間関係が築かれている。ただ、子どもたちは少ない。

本時の家での様子として、今まであまり困った気がしない。やってはいけないことは十分注意してきた。妹に対しても優しく接していると母親は思っている。